

<レポート>

R. H. トーニーと『1908 レポート』
—チュートリアル・クラスの運営原理の確立—

NPO 法人全日本大学開放推進機構 研究員 香川重遠

1. はじめに

イギリスでは、1907 年 8 月に WEA (Workers' Educational Association) の働きかけにより、オックスフォード大学を会場として、オックスフォード大学と労働者階級の教育に関する会議が開催され、翌 1908 年には『オックスフォード大学と労働者階級の教育』(*Oxford and Working-class Education*) 報告書 (以下、『1908 レポート』と称す) としてまとめられた¹。ハロップは同報告書を「イギリスにおける成人教育を扱う 20 世紀最大の 4 つのレポートの一つ」として位置づけている (Harrop 1987 : 1)。また、同報告書を翻訳した安原は「訳者あとがき」において、「同報告書はその後の大学の門戸開放のあり方を方向付けて、労働者成人教育運動のマニフェストと称されることとなった」とその意義を強調している (安原 2006 : 85)。

同報告書は WEA の名義で編集されたが、安原は「同報告書の大部分は A. E. ジマーンと R. H. トーニーによって執筆された」と述べている (安原 2006 : 85)。イギリス成人教育史において、同報告書の最大の貢献はチュートリアル・クラス運営の基本原理の確立にあったということは、多くの論者が認めるところである。R. H. トーニー (Richard Henry Tawney, 1880–1962) は WEA が先駆的に導入したチュートリアル・クラスの初代チューターを務めた人物であり、同報告書におけるチュートリアル・クラス運営原理の確立の最大の貢献者であった。

¹ 同会議の委員としてオックスフォード大学からは、ストロング、ターナー、A. スミス、ボール、マリオット、H. スミス、ジマーンが、労働者階級からは、バリー、ボワーマン、キャンベル、マクタヴィッシュ、マンズブリッジ、シャックルトン、ウィルキンソンが招集された。委員会は、1907 年の 12 月から 1908 年 10 月までの間にオックスフォード大学で 5 回の会合を開いた (WEA 1909 : v-vi)。

トーニーはラグビー校を経て、オックスフォード大学ベリオール・カレッジ卒業後、短期間トインビー・ホールにセツラーとして定住し、その後は生涯にわたって主として WEA での活動に従事し、創設者 A. マンスブリッジとともに WEA の発展と成人教育の普及に尽力した。宮坂はトーニーを、「W.E.A の歴史における、もっとも傑出した理論的・実践的指導者」と位置づけると同時に、「今世紀〔20 世紀〕英国の成人教育史における巨星——おそらく最大の——であった」と、その成人教育における貢献を絶賛している(宮坂 1996:165)。

トーニーの WEA での活動を二つに区分するならば、①前半においてはチュートリアル・クラスのチューターを務め実践者としてその発展に大きく貢献した時期である。メレディスは、「WEA の偉大なる発展は、トーニーの名と永久に関連しており、それはチュートリアルの創設である」と述べている (Meredith 2003 : 60)。②後半においては 1928 年から 1945 年の間には WEA の会長を務め、多数の論文を執筆するなど理論的な指導者として貢献した時期である。テリルは 1930 年代の WEA を「トーニーの時代」と位置づけ、「彼はイングランドの成人教育の先導者となった」と評している (Terrill 1973 : 84)。

本稿では、この WEA 前半期のトーニーの貢献を『1908 レポート』におけるチュートリアル・クラスの運営原則の確立にあるとみなし、トーニーが自らの実践や思想をどのように『1908 レポート』に反映させたのかについて論じていく。こうした研究は、今日のわが国の大学開放における講座の多様性や新しい可能性、またその核となるものを構想するうえで、大きな示唆を与えるものとなるを考える。

2. WEA におけるトーニーのチュートリアル・クラス運営

トーニーはベリオール・カレッジを卒業後、1903 年にイギリス初の大学拡張セツルメントであるトインビー・ホールに赴任した。ウィンターとジョスリンによれば、トーニーはベリオール・カレッジ卒業後の進路に慈善組織協会 (COS) を予定していたという (Winter and Joslin 1972 : 43)。トインビー・ホールへの赴任はトーニーにとって成人教育と社会問題への出会いという意味で一つの転機であった。トーニーと福祉国家の建築者ベヴァリッジはベリオール・カレッジ時代からの学友であり、彼らはベリオール・カレッジ卒業後、共にトインビー・ホールに赴任したのであったが、そのきっかけは、理想主義哲学者であったベリオール・カレッジ学寮長ケアードの影響によるものであった (Dennis and Halsey 1988 : 153)。ベヴァリッジの自伝によると、ケアードは学生時代のトーニーとベヴァリッジに対して以下のように説いていたという。

君たちが大学にいる間、君たちの第 1 の義務は政治やフィランソロピーにあるのでは

なく、自らの修養にある。しかし、この義務をやり遂げ、オックスフォードで学ぶことができるすべてを学んだ後、君たちの誰かにぜひやってもらいたいことがある。それは、イギリスには大きな富が存在しながらも、なぜこのように貧困が存在するのか、また、これらの貧困をどのようにして取り除くかを究明することである (Beveridge 1953:9)。

テリルによると、トーニーはトインビー・ホールで働き始めたころは、まだケアードの言葉の意味がわからなかったという。しかし、3年後には実践を通じて自ずと理解できたという (Terrill 1973 : 31)。トーニーはトインビー・ホールにおいて、児童園園休暇基金の事務局長を務めた。トインビー・ホールにおけるセツルメントの実践を通じて、トーニーは WEA の創設者マンスブリッジと出会い、すぐに WEA に執行部の一員として加入した。この WEA への加入はトーニーにとっての最大の転機であり、以後、トーニーは成人教育の普及に尽力することになった。

ここでもう一人の WEA チュートリアル・クラスの創設に貢献したマンスブリッジを取り上げたい。マンスブリッジは 14 歳で学校を離れ、働き始めた人物であり、十分な教育とは無縁であった。一方で、向学心の旺盛なマンスブリッジは、すぐにロンドン大学の大学拡張講座を受講し、優秀な成績を収めていた。矢口はマンスブリッジについて、「聖職者となることを目指しロンドンで暮していた彼は、独学で様々な思想家の本を読み、それだけでは飽きたらずロンドン大学の拡張講座にも通い、著名な教師の講義を直に聴く喜びを覚え、大学で学ぶことの体験のもつ意味に深く感じるものがあつた」と述べている (矢口 1998 : 122)。こうしてマンスブリッジは大学拡張の必要性と、働く人々に対して高等教育を受ける機会を確保することの必要性を考えるようになり、1903 年には WEA の母体組織を創設していた。このように WEA の最重要人物であるマンスブリッジとトーニーの経歴は両極端なものでもあつたが、この両者の協力関係上に WEA はイギリス最大の成人教育組織へと発展したのであつた。

1906 年にトーニーはトインビー・ホールを去り、以降は生涯にわたって主として WEA での活動に従事した。ウィンターとジョスリンは、「ベリオールとトインビー・ホールに続いて、彼は WEA の仕事に就くことによって、非常に幸運にも道德上の見解と政治的学問的な関心事とを効果的に結びつける方法を見出していた」と述べ、その経歴の意義を強調している (Winter and Joslin 1972 : xiv-xv)。

WEA でのトーニーの最初の貢献は、チュートリアル・クラスの運営を先駆けて実践したことから始まった。もともとチュートリアル・クラスはマンスブリッジがトインビー・ホールにおいて受講した大学拡張講座を発展させたものであつた。ブリッグスとマカートニ

一は、「マンスブリッジ自身は後に、チュートリアル・クラスの発想がトインビー・ホールの最初の 12 名の学生と共にロンドンで始まったことを認め『オックスフォードとロッチデールはそれを発展させたものであり、その〔トインビー・ホールの〕方法の系列に位置づけられる』と述べていた」といい、「彼の哲学はバーネット〔初代トインビー・ホール館長〕と非常に類似していた。マンスブリッジは『教育は〔社会的階級を〕統合するものであって、分断するものではない』と主張していた」と記している (Briggs and Macartney 1984 : 76-7)。

宮坂は、「チューターとして、当時 Glasgow 大学で経済学を教えていた Tawney に白羽の矢が立てられた。Rochdale というのは Manchester 大学に近いのだが、わざわざ遠い Glasgow から Tawney を tutor として招こうというのは、Tawney の力量に対する信頼が深かったことを意味する。なにしろ初めての実践であり、成否はチューターの能力にかかること大であったのである」と、チュートリアル・クラスの成否がトーニーの能力にかかっていたことを強調している (宮坂 1996 : 101)。

トーニーは、オックスフォード大学でチュートリアル・クラスのチューターを務め、ロッチデールやロングトンなど 5 か所を巡り歩き、労働者を約 30 名のクラスとして経済学や文学などの講義を担当した。

トーニーは、チュートリアル・クラスについて以下のように自身の言葉で述べている。

大学のチュートリアル・クラスは事実、大学のないところに設置された大学の中核であり、その組織は簡潔なものである。それはせいぜい 30 人までの受講生グループにより成り立ち、彼らは大学が任命したチューターの下で学習する目的で 3 年間、冬の間 24 週間にわたって毎週 1 回、定期的集まり、チューターの示す読書コースに従い、2 週間に 1 度、論文を書くことに同意する (Tawney 1964a : 80)。

このようにチュートリアル・クラスの特徴は、本格的なアカデミック講座という点にあった。これはトーニーの教育への情熱の現れでもあった。テリルは、「トーニーの WEA へのなよりの貢献は、その教育と労働者運動の高度な水準を維持したことであった。トーニーは WEA のクラスを娯楽的な議論の時間にしようとしなかった。トーニーは教育と労働者の社会的解放の間をつなぎ続けた」と指摘している (Terrill 1973 : 86)。

トーニーは後にチューターの経験に関して、「もし私が私自身の教育のもっとも優れた部分をどこで受けたのかと問われるなら、それは学校や大学ではなく、チュートリアル・ク

ラスの時の若気にはやった青年教師として、毎週毎週、このクラスの学生から優しくも厳しい言葉で、自惚れが挫かれていったときだ、と答えたい」と回顧している (Tawney 1964a : 82)。

それを裏付けるように、トーニーは 1912 年の初著『16 世紀の農業問題』(*The Agrarian Problem in the 16th Century*) の巻頭において、「WEA 会長テンブルと事務局長マンスブリッジとにささげる」と記し、序文において、「最後に私は言葉にはいいあわせないほど多くのものを 2 つに負っている」といい、「第 1 は私の妻に対して」であり²、そして、「第 2 はオックスフォード大学によっておこなわれたチュートリアル・クラスの受講生に対してである。私は過去の 4 年間、これらの人々と共に働く (fellow-worker) という特権をあたえられてきた。織布工や陶工や鋳夫や機械工の愛情ある批判は、政治学や経済学の諸問題について、書物からは簡単には得ることのできない多くのことを私に教えてくれた」と記している (Tawney 1912 : xxv)。

トーニーにとって、チュートリアル・クラスの運営実践は、自らが教えるだけでなく、教えられることも多かった。それは受講者が、純粋な学生ではなく、人生や職業経験豊富な社会人だったからであろう。渡邊はチュートリアル・クラスについて、「その最大の貢献は、学習プロセスにおけるテューターと受講生との『教える』—『教えられる』の(一方公的な)タテの関係性を『学ぶ』／『おしえる』の(双方向的な)ヨコの関係性に変換し得たことにある」と述べている (渡邊 2006 : 2)。

トーニーは、成人教育における「人文教育」に強いこだわりをもっており、岡田と中村は、トーニーのそうした傾向について、「実はここに、彼の成人教育論の基本的主張が存在する。すなわち、彼は、すべての人々に高度の人文(自由)教育を提供することを理想とし、その具体的方策としての『成人教育』を訴えるのである」と指摘している (岡田・中村 1969 : 94)。また、矢口も、「トーニーはアーノルドやラスキンの教養論を引き継ぎつつ、リベラルな教育を人文教育 (human education) と同じであると解釈し、大学がその提供者になるべきであると主張した」と述べている (矢口 1998 : 149)。

また、トーニーは教育における「平等」を重視していたが、その背景には、富裕層にのみ教育の機会が与えられ、労働者階級にも有能な人間がいるにもかかわらず、低い地位に押しとどめられているという当時の教育をめぐる矛盾の構造があった。それゆえに、トーニーは、「われわれが要求しているのは、生涯を通じて『普通の』労働者である人びとにも、

² トーニーの妻は学友であったベヴァリッジの実妹ジャネットであった (Pinker 1995 : 317)。

できるかぎりの大学教育を、ということなのである」と成人教育の必要性を強調する (Tawney 1964a : 74)。トーニーにとっての成人教育は「平等」な民主主義社会の形成への重要な原動力となるものであった。

トーニーは後に WEA での長き活動の経験から成人教育の意義について、以下のように述べている。

成人教育がその名に値するのであれば、その目的は単に信用しうる知識を授与するというだけではない。それはもちろん重要ではあるが、しかしそれ以上に知識を支配し利用する知的な活力を育み、それによって知識が重荷になったり、自慢の種になったりするのではなく、建設的な思想の刺激となり、行動への奨励となるようにすることである (Tawney 1964a : 83-4)。

こうした思想を含んだトーニーの先駆的な実践経験が、『1908 レポート』におけるチュートリアル・クラスの運営原則の確立の背景にあったのである。

3. 『1908 レポート』におけるチュートリアル・クラス運営原理の確立

チュートリアル・クラスの成功を背景として WEA は急速に拡大し、1908 年の時点で、1,000 を超す労働者や教育団体と連合し、その中には 420 の労働組合やその支部、150 の協同組合委員会、120 の成人学校やクラス、8 の大学拡張当局、3 のユニバーシティ・カレッジ、350 の諸協会が含まれるまでに全国的な発展をみせていた (WEA 1909 : para.10)。

WEA が全国展開する一方で、トーニーの母校オックスフォード大学においても、B. ジョウエット、T. H. グリーン、A. トインビーといった大学改革運動を主導した理想主義者たちの始めた、労働者階級への大学拡張運動も進展を見せていた。そうした背景には、当時の自由主義が行き詰まり、「二つの国民」という階級分裂と貧富の格差を引き起こしていたことに対する反動があった。彼らの理念は、二分化された国民を、平等の権利と義務を伴った「一つの市民」として統合していこうとするものであった。当時のオックスフォード大学の大学改革運動者の論文に、「市民」や「シティズンシップ」概念が散見されるのは、そうした運動の理念的な裏付けであり、トーニーがセツラーとなったトインビー・ホールは、その理念を基盤とした、オックスフォード大学理想主義の大学改革運動の産物であった³。

³ リヒターは、「オックスフォードのグリーンとトインビーは旧自由主義を駆逐した」と述べ (Ritcher 1964 : 291)、「グリーンやその学派の著作においてシティズンシップという用語ほど

こうした中、1907 年 8 月には WEA の働きかけにより、オックスフォード大学を会場としてオックスフォード大学と労働者階級の教育に関する会議が開催され、『1908 レポート』としてまとめられることとなる。矢口は同会議の意義を、「労働者各組織の代表とオックスフォード大学関係者とが対等の関係に立った会議を開催するという、まさに成人教育史の一ページを飾るにふさわしいステージが用意されたのである」と評している (矢口 1998 : 134)。

同報告書は 8 章構成であり、最初の II 章ではこれまでの歴史的経緯を辿り (WEA 1909 : chaps. I and II)、「III. オックスフォード大学の大学拡張運動」において、オックスフォード大学の大学拡張への取り組みや、奨学金制度、成人教育の必要性などを確認し (WEA 1909 : chap. III)、「IV. 大学教育への労働者による要求」において、大学教育への要求を増大させた二つの要因として、その要因を、①「公立の基礎教育や中等教育が普及したこと」と、②「労働者が社会生活上の深刻な問題に関心を抱き、教育のみがそれらの問題を解決することが可能であるという自覚をもつようになったこと」をあげている (WEA 1909 : para. 66)。

そして、社会運動の重要性にふれ、そうした背景には独立労働党や社会民主党などの政策綱領にも見て取れ、それらには、「大学によって提供される最高度の類の教育は、特別な才能を有する人間や開明的な一部の人間によってその価値を認識されているだけではなく、組織化された労働者の大群の意識の中にも、人間の福利における不可欠な要素として入り込んでいるのである」といった趣旨が含まれていた (WEA 1909 : para. 76)。

トーニーは、1947 年に WEA から身を引いた後に、WEA の拡大の軌跡をなぞるかのようになり、「イングランドでは、主な教育運動はすべて社会運動でもあった。それらは、人間らしい生活、およびそれをもっとよくしていけるような社会についての、ある特定の考え方が、——精神と人格の陶冶という——ひとつの分野で表現されたものであった」と述べているが (Tawney 1964a : 84)、こうした記述は先述した同報告書の引用と一致するものである。

また、同報告書は、大学拡張は階級間格差を解消するためのものでもあるとし、「あらゆ

多用されたものはなかった」とも指摘している (Ritcher 1964 : 344)。また、デニスとホールジーは、「19 世紀後半オックスフォード大学のグリーンによって提起された理想主義のシティズンシップ論という社会的な指標は、イギリスの自由主義の理論と実践に目覚ましく解体的な衝撃をもたらした」と指摘している (Dennis and Halsey 1988 : 125)。

る社会階級の指導者たちが、大学教育によって提供されるような、イングランド社会全体の歴史的発展や経済の状態に関する広範な知識を身に着けることは重要である」と主張している (WEA 1909 : para. 78)。

同報告書では、階級間格差を克服するために、「V. 大学の境界を超えたチュートリアル・クラスの設置」を具体的に提起している。冒頭では、発展の 2 つの方向性として、①「労働者の要求にとくにあわせた、以下に示すような性質のクラスを産業都市に設けること」、②「そうしたクラスに学ぶ労働者階級の一部の学徒が、常にかつ困難なくオックスフォード大学に進学して学び、カレッジ生活の恩恵にあずかることを可能にする措置を講じること」をあげ (WEA 1909 : para. 86)、この 2 つの方向は分離すべきではないことを主張している (WEA 1909 : para. 87)。

その具体的提案として同報告書はチュートリアル・クラスの設置を以下のように提案している。

第一の提案は、いくつかの産業都市に 30 人を超えない規模のチュートリアル・クラスを設置しようというものである。これらのクラスでは、労働者とオックスフォード大学の代表とが協議して作成した学習計画が実施される。クラスを担当する講師はオックスフォード大学が任命し、その俸給の半分を負担する。彼らはオックスフォード大学のカレッジないし全学によって任命された、大学の講師としての立場で教えるのである (WEA 1909 : para. 88)。

続けて、チュートリアル・クラスの組織について、「これらのクラスは労働者の教育要求に応じるもので、彼らの全面的な支援を受けるに値するものであるという労働者代表側に強い信念がないといけない」といい、「そのためには、進んでクラスの学生を集め維持し、必要な財政措置の一部を講じるような、労働者階級組織が存在する地域で、クラスを発足させることが望ましい」と主張し、こうした労働者代表組織には WEA を該当させている (WEA 1909 : para. 89)。また、労働者階級の人々が運営する利点として、「教師の選任の権限を労働者代表に与えること」が提言され、その理由として「高等教育は労働者に対して上から押しつけられるものではない。労働者の高等教育は労働者自身と、労働者ではないものの、その他の点で信頼できると労働者が判断した人々によって組織され運営されなければならない」と述べられている (WEA 1909 : para. 90)。

そして、同報告書はこうした主張の根拠として、当時、トーニーがチューターを務めた、ロッチデールでの「産業史」のチュートリアル・クラスの実例を紹介している (WEA

1909 : para. 93)。ウィンターとジョスリンは同報告書にトーニーのチュートリアル・クラスの実践が引用されたことを、「拡張教育の潜在的な価値の証拠」と評している (Winter and Joslin 1972 : xv.)。

その上で、クラスの規模としては、「われわれの見解では、40 人のクラスでさえ規模が大きすぎる」といい、「彼らをそれぞれ 25 人から成る 2 つのグループに分割するのがより良い方策である。こうした手段によって、身につけている知識や知的能力の点での学生の多様な差異から生じる問題は解決されよう。教師は個人指導という形式で個々の学生がかかえる困難に対応することができ、学生の小論文を詳細に検討し、読むべき文献について指導することが可能となろう」と結論付けられていた (WEA 1909 : para. 94)。さらに、予備クラスについても、「われわれが提案しているようなチュートリアル・クラスが初めて設置される場合、通常、そこで提供される教育活動を十全に活用できるほどに高い能力を有した学生の数が 30 人を超すことはない」と、定員を規定し、学生と教師の個人的関係については、「学生と教師の間の密接な関係」は「どのようなものであれシステム上不可欠の事柄」と想定され、学習の継続性とクラスの出席については、「学習の継続性の原理」の確認と「ロッチデールでは、クラスへの参加が認められた学生は、クラスに 2 年間出席するという誓約書を書かされた」という事実が付記されていた (WEA 1909 : para. 97)。

一方で、教師の資格においては、「教師の第一の義務はもちろん、講義を行うことによって、学習課程を履修するクラスの学生を支援することであろう」とし、また、「学生の小論文の指導に際しては、それらの『添削・修正』だけでなく、十分なコメントと批判を加えなければならない」と規定されていた。チューターに関してはオックスフォード大学の教師を採用することを前提としており、その理由として、「チュートリアル・クラスが、同時にオックスフォード大学自体において正規の教育活動に従事している教師によって担当されるという事実によって、チュートリアル・クラスとオックスフォード大学とを密接に結びつけることにより、教師の資格に関して学生に信頼感を与える」と述べられていた (WEA 1909 : para. 105)。それ以外にも、「高度な教育水準の維持」や「オックスフォードにおける政治学、経済学の研究への寄与」もその他の理由とされた (WEA 1909 : paras. 106 and 107)。

以上が、簡潔ながらも、同報告書の提起したチュートリアル・クラス運営の原理であった。マリOTTは、「1908 年に、チュートリアル・クラスのシステムは確立され、支援するだけの価値や特徴を有する十分に貴重なものである」という厳重な理解をもって、中央政

府から寛大な無償援助を得るようになった」と述べている⁴ (Marriott 1984 : 9)。

最後に、同報告書は終章において、「われわれの提案は、その実現が期待される、民主的な教育ならびに教育に根ざしたデモクラシーの発展へ向けた、新たな一步の小さな始まりに過ぎない」と述べたうえで (WEA 1909 : para. 142)、結論部分において「われわれはオックスフォード大学と労働者階級の教育という喫緊の重要性を有する問題に関心が向けられるように、そしてまた、問題の解決に少しでも寄与できるように願って本報告書を提出する」と、締めくくられている (WEA 1909 : para. 145)。

同報告書において運営原理の確立されたチュートリアル・クラスは、時代とともに縮小していく。そこには修業年限の長さなどの要因があったが、ハロップは、「チュートリアル・クラスは今では大学の成人教育提供の非常に小さな部分を占めているが、しかし、それは間違いなく成人教育の歴史において名誉ある場であり、高度な教育をそれ以外の方法ではそれを欲しながらも、得られない人たちに提供した」と評している (Harrop 1987 : 5)。

4. おわりに

トーニーの WEA での初期のチュートリアル・クラスの実践は、『1908 レポート』における運営原理の確立に大きく貢献し、その後の WEA の発展のみならず、イギリス大学拡張の発展にも多大な影響を及ぼした。

トーニーが生涯にわたって成人教育の発展に尽力したのには、『平等論』(Equality) で言及している、コミュニティ形成のためには成員間に「共同教養」(common culture) の確立が必要であるという信条があったからであろう (Tawney 1964b : 43)。現在ではイギリスにおいてもチュートリアル・クラスは衰退しているともいわれるが、今後の大学開放の時代において、大学が高度で多様な幅広い様々なカリキュラムや講座を用意するうえで、チュートリアル・クラスを活用してみるだけの価値はあると思われる。

大学開放の講座が多様性をもつことは受講生のニーズへの対応をより可能とするものだろうし、今日において、より本格的に学びたい、一方向的な講義方式の講座では満足できないという受講生もいるだろう。また、トーニーが行ったようなチュートリアル・クラス形式の巡回講座を応用し、教育機会が少なく過疎化している地域社会へ大学が講師を供給するという方策も本来の大学拡張の理念に基づいており検討に値する。巡回講座では立

⁴ その後のチュートリアル・クラスの発展に関しては、宮坂が WEA の年次報告書をもとに紹介している (宮坂 1996 : 110-16)。

派な建物などはいらず、講師を斡旋し、公民館など講義を行うだけの場所を確保するだけで足りるので、費用はそうかさむことがない。

チュートリアル・クラスを教育機会の少ない地域社会で実践することによって、文化や教養の地域間格差を埋めることは地方創成の観点からも望ましく、まさに大学開放が貢献できる分野であり、国や地方自治体にとって社会的投資にも値するであろう。そういった意味では、現代の様々なニーズを考慮し、現代の事情に則した上で、大学開放においてチュートリアル・クラスを原型とした講座を組んでみる意義はあるだろう。

参考文献

- Beveridge, W. (1953) *Power and Influence*, Hodder and Stoughton Ltd.
- Briggs, A. and A. Macartney (1984) *Toynbee Hall : The First Hundred Years*, Routledge and Kegan Paul.
- Dennis, N. and A. H. Halsey (1988) *English Ethical Socialism : From Thomas More to R. H. Tawney*, Clarendon Press. Harrop, S. (ed.) (1987)
- 香川重遠 (2014) 「R. H. トーニーの成人教育における軌跡と思想」全日本大学開放推進機構『UEJ ジャーナル』14、28-39。
- Marriott, S. (1984) *Extramural Empires: Service & Self-interest in English University Adult Education 1873-1983*, University of Nottingham, Department of Adult Educ.
- Meredith, K. R. (2003) R. H. Tawney and WEA, Stephen, R. (ed). *A Ministry of Enthusiasm : Centenary Essays on the Workers' Educational Association*, Pluto Press, 59-76.
- 宮坂広作 (1996) 『英国成人教育の研究 II』明石書店。
- 岡田渥美・中村 清 (1969) 「R. H. トーニーの『成人教育』思想」大阪大学文学部教育学科『待兼山論叢』3、87-113。
- Ritcher, M. (1964) *The Politics of Conscience : T. H. Green and His Age*, University Press of America.
- Tawney, R. H. (1912) *The Agrarian Problem in the 16th Century*, Longman.
- . (1921) *The Acquisitive Society*, G. Bell and Sons.
- . (1964a) *The Radical Tradition : Twelve Essays on Politics, Education and Literature*, George Allen and Unwin.
- . (1964b) *Equality : With an Introduction by Richard M. Titmuss*, George Allen and Unwin.
- Terrill, R. (1973) *R. H. Tawney and His Time : Socialism and Fellowship*, Harvard

University Press.

渡邊洋子 (2006) 「イギリス成人教育の方法論的成立に関する史的考察——初期チュートリアル・クラスの生成過程に注目して」『京都大学教育学研究科紀要』52、1-26。

Winter, J. M. and D. M. Joslin (1972) *R. H. Tawney's Commonplace Book*, Cambridge University Press.

Workers' Educational Association (1909) *Oxford and Working-class Education : Being the Report of a Joint Committee of University and Working-class Representatives on the Relation of the University to the Higher Education of Workpeople, second edition, revised*, Oxford. (=2006、安原義仁訳「オックスフォード大学と労働者階級の教育——労働者の高等教育と大学との関係に関する大学ならびに労働者階級代表合同委員会報告書」広島大学高等教育開発センター。)

矢口悦子 (1998) 『イギリス成人教育の思想と制度——背景としてのリベラリズムと責任団体制度』新曜社。

Pinker, R. (1994) 「R. H. トーニーの経歴」 (=1994、岡田藤太郎・木下健司訳『平等論』相川書房、314-25。)

香川 重遠 (かがわ・しげとう)

1976 年、佐賀県生まれ。NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員。イギリス成人教育・イギリス社会学・大学開放論専攻。主要論文；(2008) 「イギリス国民健康保険における認可組合制度の再考」『社会政策研究』第 8 号、233-51。；(2010) 「R. ピンカーの市民権論——T. H. マーシャルの継承と発展」『福祉社会学研究』第 7 号、99-117。；(2015) 「トインビー・ホールにおける『市民教育』——イギリスにおけるシティズンシップ教育の源流」『生涯学習・社会教育ジャーナル』第 8 号、近刊予定。NPO 法人全日本大学開放推進機構会員、福祉社会学会会員、日本イギリス理想主義学会会員、生涯学習・社会教育研究促進機構会員。